E. M. サトウ 蒐集

ジャパノロジー資料について

楠 家 重 敏

幕末期の Ernest Mason Satow (1843-1929) の活動については自著 “A Diplomat in Japan”, また最近では萩原延寿の「遠い崖——サトウ日記抄」(朝日新聞夕刊連載中) で詳細に記述されている。萩原がその執筆に際し多くの材料を得ている英国ロンドンの Public Record Office の所蔵にかかる Satow Papers (PRO 30/33) にはさらにぼう大な資料群を納めている。

ところが、サトウの日記 (PRO 30/33. 15/1-15/6, 16/1-16/12, 17/1-17/17. 雄松堂よりマイクロ・フィルムが発売されている。) は主として彼の政治的活動に多くの頁をさいてはいるものの、ジャパノロジストとしてのサトウの姿はそこからは浮びあがらない。しかしながら、サトウが W. G. Aston や F. V. Dickins などに往復した書簡や他の記録類を繙くと、この日記の欠を補うことができる。(拙稿「在英ジャパノロジー関係資料について——サトウ・ペーパーズを中心として」——『日本近代史学会報13』所収、を参照のこと。)

そこで本稿では Satow Papers (PRO 30/33) の1/3から1/5までの資料を紹介し、さらに天理大学図書館に現存するサトウの編纂物 “Magazine, Articles on Japan” を補足的に使用して、幕末から明治初年にかけての情報収集者としてのサトウの姿を再現してみたい。

(1)

さて、サトウが最初の来日をとげたのは1862(文久2)年9月のことで、このときより彼は生麦事件・薩英戦争・四ヶ国下関砲撃事件など幕末期の大きな事件を目撃した。その

間、サトウは通訳官として日本語の学習にはげみ各種の文書を翻訳していった。

昭和女子大学近代文学研究室編『近代文学研究叢書31』にあるサトウの著作目録をみると、1865（慶応元）年には *The Various Styles of Japanese Writings. (Chinese and Japanese Repository. No. XX)* という論文と *Translation of the Diary of a Member of the Japanese Embassy to Europe in 1862~63. (Chinese and Japanese Repository. No. XXIV~XXIX)*¹⁾ という翻訳を一件づつ活字化している。また、翌年の1866（慶応2）年には「英国策論」の原文をジャパン・タイムズに掲載して、幕末の政界に少なからぬ反響を得ている。この「英国策論」掲載のいきさつを論じる際によく紹介される資料として

On one occasion I went away for a few days with Charles Rickerby of the "Japan Times," and having thus become intimate with him, was permitted to try my inexperienced pen in the columns of his paper. My first attempt was an article upon travelling in Japan, but before long an incident occurred which tempted me to write on politics.²⁾

がある。上記の資料を読むとサトウがジャパン・タイムズにかなり政治や旅行の記事を投稿していたことが想像されるが、前述の『近代文学研究叢書31』の著作目録には1867（慶応3）年から1870（明治3）年までのサトウの著述が記されていない。

しかし、*Satow Papers* の1/4をみると1867（慶応3）年分こそ見あたらないが、翌年の1868（慶応4）年分には年代が確認されているものだけでも14件あり、うち活字化されているものは10件をかぞえる。すべて翻訳であるが、今ここに題目を掲げておくと以下の如くなる。（✓印は活字化されたもの）

Kokushiriaku

Memorial of Tokugawa Naifu. Jan. 1868

Memorial agst Satsuma. Jan. 1868 [注, agst は against の略]

List of Satsuma Crimes.

Japanese Pamphlet on Xtianity. Baka 1868

✓Proclamations agst Tokugawa. Feb. 8 1868 [注, agst は against の略]

✓Constitution (From Kyoto Gazette of Mar. 1868).

✓Memorial of Echizen Satsuma & 4 others (From Kyoto Gazette of Mar. 1868)

E. M. サトウ蒐集ジャパノロジー資料について

- ✓Proclamation of Daijokan in answer. (From Kioto Gazette of Mar. 1868)
- ✓Mikodo's Speech to Daimios. (From Kioto Gazette of Mar. 1868)
- ✓Okubo Ichizo's Memorial (From Chugai Shimbun. '68 4 10)
- ✓Translations from Kioto Gazette. No. 11- Reports from Yedo terms offered to Tokugawa Keiki.
Dialogue on strength of parties. No. 16 (江湖新聞)
Memorial a certain daimios. (From No. 8 江湖新聞)
- ✓Article on the Yamato Damashii. (Spirit)
- ✓Memorial of Chionin no miya's retainer; antiforeign.
- ✓Art; fr. Japan Herald on Niigata. (Original) [注, Art は Article, fr は from の略]
- ✓Art; fr. Japan Herald on forfeiture of Half Hatamoto's revenue. [同上]
- ✓Criticism on lachon's French Jap's Dictionary. [注, Jap は Japanese の略]
- ✓Art; fr. Japan Times on Treaty (May 19. 1868). [注, Art は Article, fr は from の略]
- ✓Tsuda Shinichiro's Memorial. Japan/Herald/overland. Augst. 1868.
New Essay on the Protection on the Country (Agst. Xtianity). [注, Agst は Against の略]
- ✓Constitution of Japan.
- ✓Memorial of Nishimura Kanae. Japan Herald overl' Sun. 22/8/68.
Vol. 27. of Gaibantsusho, Contains correspondence of James I & Iyeyasu.
- ✓Proclamation of Hering amnesty. Sept. 1868.
- ✓Jap's Parliamentary Debate & Memorials. fr. London Times. 18/8/68. (注, Jap は Japan, fr は from の略)
- ✓Surrender of Aidzu.
- ✓Punishments of rebellious Daimiios.

このリストをいちべつしてみると、政治情勢に関するものが圧倒的であるが、草稿には『国史略』や『外蕃通書』がみえ、ジャパノロジストとしてのサトウの片りんがうかがえ

る。活字化されたものは「都鄙新聞」(Kioto Gazette), 「中外新聞」(主筆柳河春三) といった幕臣系新聞(草稿にも福地源一郎の「江湖新聞」が含まれている。)や“Japan Herald”, “Japan Times”, “London Times”という欧字新聞から情報を得たものである。

この時期のサトウの日記を繙くと4月から5月にかけて空白が続いている。また、後年の“A Diplomat in Japan”をみると、

My diary contains no further entry until the middle of May, and letters I wrote to my parents narrating the incidents which befell us at Kioto have not been preserved. A very full account of this affair, written by Mitford to his father, was communicated to the “Times,” and the despatch of March 25 in which the chief reported the whole affair was included in a volume of “confidential print” and has not been published. See also “Memories” by Lord Redesdale, ii. 449. A briefer narrative based on official documents is to be found in vol. 2 of “The History of Japan” by F. O. Adams. As long as we remained at Kioto I was so busy with interpreting between the chief and Japanese high functionaries and in translating documents that my journal had to be neglected, and my memory of what occurred over fifth years ago, left unrecorded at the time, is scarcely full enough to afford material for completing this chapter unaided.³⁾

とあり、京都に赴きパークスの通訳をつとめたり、公文書の翻訳などで多忙の日々をおくっていたことが記されている。上記の1/4のリストはその成果であろう。

サトウ研究家の萩原延寿は、この時期にサトウが旧幕臣の柳河春三との交渉が開始されたことを指摘している。このことを物語る史料として「中外新聞」の次の二記事がある。最初のもは慶応四(1868)年四月十三日付の記事である。

英人サトウ曰、新聞紙は成る丈事実をよく糺して実説を載する様にすべし。其故は天下の人民に信用せらるゝ物なれば其関係小ならざるを以てなり。大久保氏の建白〔注、薩摩藩大久保市蔵の建白、中外新聞第七号所収〕、会津藩の歎願書〔注、同第十号所収〕などを出したる最も佳なり。吾既に英文に訳して新聞局へ贈れり。是れ日本の事情を外人にも広く知らせめんが為なり。⁴⁾

E. M. サトウ蒐集ジャパノロジー資料について

つぎは同年五月九日付けの記事である。この記事のタイトルは「横浜在留外国人より柳河氏へ贈れる書翰の訳」とあるが、この場合、「横浜在留外国人」とはサトウのことにはかならない。

新聞紙追々御恵投被下辱奉存候。小生儀此節閑暇に有之、日本語学専ら相心掛け居候間、幸に中外新聞を披き読習ひ候へば、日本文章と方今の時勢とを同時に了解いたし候故、殊之外重宝に御座候。尚此上引続き無中絶御差送り相成候。英吉利、亜墨利加、和蘭三ヶ国の新聞紙、飛脚船の度毎に入手候間、其度々呈上可仕候。(中略) 小生輩の如く数年故郷を離れ萬里外に客來いたし居候ては、本国飛脚船の参り候度毎に新聞紙の来るを待兼候事、霖雨中に日光を望むが如くに御座候。新聞の外、船客の情を慰め候は、写真の画像に御座候。毎に船便に寄せ來り候父母妻子朋友の像を見ては、其壮健無事なるを知りて安堵いたし候。或時は独居岑寂に堪兼候節も、朋友の肖像を反復展覽いたし候へば、直に其人に対話いたし候如く、旅中の憂苦を忘れ申候。⁵⁾

このようにサトウは柳河の「中外新聞」より幕末の政情を理解し、これを翻訳して在日イギリス外交官の行動の指針とし、自らは日本理解を深めていった。ちなみに、慶応四(1868)年四月十三日付の記事にみえる「大久保氏の建白」と「会津藩の歎願書」は Okubo Ichzo's Memorial と Surrender of Aizu という英語の標題が付されて Satow Papers (PRO 30/33 1/4) に納められているが、サトウはこれを上司のパークスに提出している⁶⁾。これまでサトウが得た幕末の政治情報が主として倒幕勢力からのものであったのに対し、このころから幕府側からもニュース・ソースがとれるようになったことは注目すべきことである。これはこの少し前に行なわれた西郷・勝会談に対する情報をイギリス側が察知できなかったことに対する反省からくるものであろう

(2)

Satow Papers の1/4にみえる1869(明治2)年の目録を追ってみると、サトウの同僚である F. O. アダムスと A. B. ミットフォードの記事を除くと、活字化されたものは数少ない。しかし、サトウの“A Diplomat in Japan”には

My translation of the sentences of the northern daimiōs was published in

the “Japan Herald” of January 30. This state paper completed the discomfiture of the som-bak-ka diplomats, the term invented by the Japanese for application to the foreign ministers who supported the cause of the Shōgunate as far as was possible for them. 7)

という記述がある。1月30日付の Japan Herald に佐幕派（皇幕家）外交官に衝撃を与えた翻訳を發表している。当時の状況から内容を推定すると、戊辰戦争における東北諸藩処分の詔書と思われ、これにより「北方諸侯」の全面的敗北が確定したのである。

サトウはこの1ヶ月ほど後の2月24日に賜暇を得て本国イギリスに久しぶりに帰国することになった。そして、彼の“A Diplomat in Japan”もここで幕がおろされる。したがって、彼はこの年にはわずか2ヶ月ばかり日本にいただけなので活字化されたものや草稿は少ない。試みに1869年の目録を以下に掲げておくと、次のようになる。（✓は活字化されたもの）

✓Japanese Pulpit (from Saturday Review) on Mitfords' Japanese sermons in Cornhill.

Wreak of H. W. S. Rattler fr. J (apan) T (imes) Overland Mail. Oct 2. 1868.

Murder of Omura Masujiro, papers on.

Memorial of Tokugawa on incomes of Shidzuoka clan.

Letter of Oshinokōji to the Prime Minister.

Schedule of Offices, or Shoku-in-Rei.

Pay of Japanese Govt. officials.

Various 1869.

Notes on Satuma clan in 1869.

List of Jakō no ma.

Notification about issue of base coin by daimiōs.

Execution by disembowelment of Fukiage retainers.

Schedule of Imperial income in 1868.

Pardon of Keiki and Aidzu. 1869.

Departure of Empress for Yedo.

E. M. サトウ蒐集ジャパノロジー資料について

Memorial of Ohashi Teru on Chinese Studies

見ればわかるように、ほとんどすべてが政治情勢に関する草稿である。目録の最初と最後のみが東洋研究に関するものであるが、注目すべきは活字化されている最初の論説である。これはサトウの同僚で、幕末期においてはアストンを含めて英国人三大ジャパノロジストのひとりとされたA. B. ミットフォードがロンドンの文芸雑誌『コーンヒル・マガジン』に書いた著述に関する批評である。ミットフォードが執筆した *A Japanese Sermon* はこの2年後に発表される彼の代表作 “*Tales of Old Japan*” (1871) にも収録されているが、サトウはすでにこの切り抜きを後に紹介する天理大学図書館所蔵の “*Magazine, Articles on Japan*” (E. M. Satow ed. Vols. 2) に納めている。外交官から日本学者へ変ぼうしつつあるサトウの姿が浮びあがってくる。

(3)

翌1870（明治3）年、サトウは再び来日しこれ以後公使館付きの書記官として1883（明治16）年までの13年間パークスの補佐をつとめることとなる。

さて、1870年のサトウの足どりについて調べてみると、あまりにも情報量が少ない。サトウの日記には12月27日の条しか記述がないので⁹⁾、これだけではサトウの再来日の日付すら不明となってしまう。この年のサトウの著述は7月に *Phoenix* の創刊号（発行地ロンドン）に発表した ‘*The Ainos of Yezo*’ 以外は明白ではない。これは多分サトウの帰朝まもなくして1871年となってしまったからであろう。

明けて1871（明治4）年に公表されたものは従来 *Phoenix* に投稿した ‘*An Episode in Japanese History*’ のみであったが、前記の目録にはこれ以外に三件の印刷物がある。すなわち、(1) ‘*Travel to Fuji*’, (2) *Attempt to lower valley of the Kuisatsu*, (3) *Mitford’s article in the Cornhill. Remarks on Sa and U-Konye Fu.* がこれである。ただ、これらがサトウの筆になるものであるか否かは、サトウの日記を見なければ断定はできない。(1)の富士山周辺への旅行は1871年8月22日より同月31日にかけて行なわれており⁹⁾、(2)の草津への旅は該当記事がなく、(3)は現在のところ比定できる術もないので、確実にサトウの著述といえるのは(1)のみである。以下に1871年に書かれたものを掲げておく。

Preface to Hekiji Kenken roku.

Extracts from Kokushiriaku.

Memorial from Tosa 'or land bearing & retainers incomes.

Letter of Mikado to Satsuma & Iwakura's commission.

Imperial Letter regretting murder of Heizawa Sangi.

Answer of Osumi no Kami.

Memorial of Chôshiu about Kurumés' harbouring the runaway Kiheitai.

Memorial of Kaga, offering 20,000 to build Daijo Kan.

Memorial of prince of Awa, proposing to do away with the title of Chihanji.

Extract from the Guaishi. vol. I.

Iwakura's mission to Satsuma.

Plot of Kugé. arrests made in Yedo among officials.

Death of the Prince of Choshu.

Article on Document attributed to Saigô the elder.

Military districts, Establishment of.

Storm at Kóbé.

Malan's Rokumai biôbu. Review.

Memorial of Doi of the Maruoka clan.

Patent law.

Shimbunzasshi, appearance of extracts fr. No. 1.

Abolition of Han.

Shimbunzasshi, No. 2.

Shimbunzasshi, No. 6.

Sites of the Imperial Capital.

Senôji, Mausoleum of the Empress.

Barriers (Sekisho).

Grades of Shinto priesthood (fragmentary).

Chô, pamphlet against feudality.

E M. サトウ菟集ジャパノロジー資料について

Petitions of Choshu & his son.

Petition of Inshu.

Gomonzeki.

Fukuko Ron. part 1

Yumé monogatari.

Law promulgating forms of contracts.

Sei Shōgun.

Kokushi Riaku, mythological part continued from p.

Form of contract. Original with

Shimbun Shinroku. No. 1

Chinjiu fu.

Record of the year 1871.

Guards (Ukoneyi)

In no Tenjō bito.

Jōgē no Hokumen.

Jinjin, hiogo.

Daimios leave for Yedo. Disturbances.

Women may go abroad. Imperial Message.

Fukuyama, disturbances at.

Hikitouke bugio.

Kokushi.

Dobo.

Kuamei.

✓Travel to Fuji.

✓Attempt to lower valley of the Kuisatsu.

✓Mitford's article in the Cornhill. Remarks on Sa and U-Konye Fu.

この目録は上述の三件以外はすべて草稿であるが、そのなかには明治四（1871）年五月に創刊された『新聞雑誌』の1，2，6号から翻訳した草稿がある。そのほか、この年翻

訳したものと思われる草稿は30件以上にのぼるが、このころになると政治記事のひん度は少なくなり、むしろ日本文化百般に関するものが多くなる。外交官としてよりも日本文化研究者としてのサトウの姿がますます色濃くなってくる。

(4)

以上の1868（慶応4）年より1871（明治4）年までの記事は Satow Papers (PRO 30 /33) の1/4に残されているものであるが、1872（明治5）年以降になると Satow Papers の1/3, 1/5そして天理大学所蔵の“Magazine, Articles on Japan”と関係記事は一挙に増加してくる。

1872（明治5）年のサトウの著作としてよく知られているものに創立されたばかりの The Asiatic Society of Japan の刊頭を飾った ‘Notes on Loochoo’ と ‘The Geography of Japan’ がある。前者のテーマは彼の親友 Basil Hall Chamberlain (1850～1935) によって大成されるが、後者のテーマも後年 “A Handbook for travellers in Japan” (B. H. Chamberlain & W.B. Mason. ed.) という著作に結実する。

Satow Papers の1/5をみると以下の新聞記事がある。（ちなみに1/5はすべて活字化されている。）

Japanese Notes. (Jan. 1872)

Travel in the interior. (About Fuji)

Travel in the interior. (Hakone-Atami, Aug. 1871)

Conversion of the Han into Ken. (Japan Weekly Mail. April 5 1872)

Travel in the interior. (Yedo to Nikko and back. March 1872)

A New Japanese Dictionary. (Japan Weekly Mail. April 27 1872)

Japanese Notes. (May 1872)

Copy of Proclamation to the Fu and Ken. (Daijokan Nisshi No. 26 May 4 1872-Japan Weekly Mail June 1872)

Religious Ceremonies in Yedo. (14th June 1872)

Japanese Notes.

E. M. サトウ蒐集ジャパノロジー資料について

Japanese Notes.

Shimadzu Saburo

Japanese Notes (August 1872)

Japanese Notes (Sixth month 1872)

Japanese Notes (July 28th 1872)

Japanese Notes

Notes of the week

A walk from Kobe to Nagasaki (Japan Weekly Mail. Sept. 1872)

1872 (Japan Weekly Mail. Jan. 4 1873)

A Grammar of Japanese Written Language, with a Short Chrestomathy. By
W. G. Aston (The Athenaeum. June 29 '72)

これをみると旅行記が4件ある。すなわち、(1) Travel in the interior. (About Fuji),
(2) Travel in the interior (Hakone-Atami Aug. 1871), (3) Travel in the interior.
(Yedo to Nikko and back. March 1872), (4) A walk from Kobe to Nagasaki (Japan
Weekly Mail. Sept. 1872) がそれである。このうち(1),(2)は前年のサトウの日記に付合す
るものであるが、(3)の江戸と日光の往復は1872年3月13日より末日ごろに行なわれた¹⁰⁾。
(4)はサトウの日記に該当の記述がない。これにより若干のサトウの著作が発見されたこと
になる。

この年の傾向としては廃藩置県に関する論説はあるものの、ますます政治的論説はうす
れてきて、旅行記や辞書の書評など文化論に関するものが多くを占めてきている。

ところで、Satow Papers の1/3をみると、この一冊は Chronological Tables and
Various Notes と題されているが、ほとんどは1872 (明治5) 年ごろの稿である。以下に
掲げておく。

A Short Geography of Japan

Synoptical Tables of Japanese Chronology

Members of Imperial Family in 1870

Permanent Notice. Seisatsu

Number of Years since the Creation of Japan

Memorial of a Western

Nakatsukasa Shō (Kuanshoku Bikō. vol. 2)

Hiakunin Shiu (Hitoyogatari. vol. 7, f. 36)

Tai Hei Nempīō. f. 3

The Ohochi family (Guwaishiho. BK. 2)

Mouri family

From the 大成武鑑 of some date after 1823

これらの草稿のなかには前述の ‘The Geography of Japan’ の下書きになったものもあり、またこの一冊自体が1874（明治7）年にサトウが自費出版した “Japanese Chronological Tables” の初稿になったと思われる。こうして Satow Papers の1/3と1/5の1872（明治5）年分を総合してみると、地理・年代記などの文化史的記述が目立ってきている。

(5)

さて、前述の『近代文学研究叢書』のサトウ著述目録をみると、1873（明治6）年には “Japan, 1853~1864, or Genji Yume Monogatari.” と “Kinsei Shiriaku.” という翻訳が二本と “Kuaiwa Hen” という語学書が一冊ある。そして、Satow Papers の1/5をみるとこの年には次の著作が収集されている。

Japanese Notes (Jan. 9th 1873)

Notes of travel. From Kioto to Yedo by the Nakasendo. (Japan Weekly Mail. Feb. 8 1873)

Japanese Notes.

List of Castles to be kept up.

Distribution of the Japanese Army.

The withdrawal of the Anti-Christian

Edict (Japan Weekly Mail. March 22 1873)

Notes of travel. The Tama gawa valley.

E. M. サトウ蒐集ジャパノロジー資料について

The Memorial of Inouye Kaoru and Shibusawa Shigekazu. May 7 1873

The Memorial of the ex-finance Ministers.

To the Editor of the Japan Weekly Mail.

A Japanese view of the finance question. (Japan Weekly Mail)

The land tax in Japan. (July 5 1873)

Japanese lexicography.

The working mines in Japan.

Japanese Note. From the Naigai Ichiran.

Revd. Mr. Summers on Japan and the Japanese (To the Editor of the "Japan Weekly Mail" Aug. 26 1873)

Correspondence. ("Japan Weekly Mail" Sept. 6)

Correspondence. ("Japan Weekly Mail" 10th. Sept. 1873)

Correspondence. ("Japan Weekly Mail" Oct. 4)

Japanese Notes. (Oct. 1873)

"Japan Weekly Mail" (Dec. 13 1873)

Japanese Notes (Oct. 19th 1873)

Representative Government in Japan.

Notes of travel. Oyama and its neighbourhood.

Japanese Notes.

Census of Japan for the 5th year of Meiji.

The Revenue.

War with Corea.

Notification.

The trade in silkworms' eggs.

Memorial of the dealers (Egg flowers).

Japanese Notes.

A plea for war with Corea and Justification & Discontent.

An appeal to the Nobles.

Warnings in plain works.

このうち Japanese Note と Correspondence は日本の政情についてコメントしたものであるが、ここで注目すべきは国内旅行記が (1) Notes of travel. From Kioto to Yedo by the Nakasendo, (2) Notes of travel. The Tama gawa Valley, (3) Notes of travel. Oyama and its neighbourhood の三件ある点である。これらの紀行文はすべてサトウの日記と付合しているので、サトウの著作と断定される。そして、これらの記事はのちにサトウがホーズと共編してまとめあげた “A Handbook for Travellers in Central and Northern Japan” (1881) の基礎資料になるもので、この時期から総合的な日本案内書を執筆することを企図していたことがうかがえる¹¹⁾。

(6)

1874 (明治7) 年のサトウの著作には “The Shintau Temples of Ise”. “Guide Book of Yedo”. “Japanese Chronological Table.” がある。また、Satow Papers の1/5をみると以下の記事が収集されている。

New Japan. (April 1874)

The Shinto temples of Ise. (By E. Satow)

Reply of Soyejima, Goto and Itagaki to Kato's argument Representative Government in Japan.

Trade in silk worm's eggs.

Translation

The deliberative assembly.

Japanese Notes.

The trade in silk worms' eggs.

Regulations for interior, First draft for consideration.

このなかには、サトウが The Asiatic Society of Japan に発表した論文 ‘The Shinto Temple of Ise’ が重複しているが、そのほかにも加藤弘之の民撰議院設立建白書批判が翻訳されており、サトウの政治的関心がよくわかる。

これまでは比較的政治色の強い Satow Papers (PRO 30/33) の1/3と1/5を中心に1868 (慶応4) 年より1874 (明治7) 年までのサトウの著作と収集物についてみてきたが、今度は方向をかえて天理大学図書館所蔵の “Magazine, Articles on Japan” (E. M. Satow. ed.) について考えてみたい。

この編纂物がサトウの手によって最終的にまとめられたのは1900 (明治33) 年ころと思われるが、収集されているものは幕末と明治初期のものがほとんどである。本書は二巻より成るが、まず第一巻の目次を掲げると以下ようになる。

A Japanese Sermon. (A. B. Mitford)

Another Japanese Sermon. (A. B. Mitford)

Wonderings in Japan 1. (A. B. Mitford)

Wonderings in Japan 2. (A. B. Mitford)

A day in a Japanese theatre. (E. H. House)

Japan. (Printed Blackwood in Edinburgh, Sept. 1872 By Prof. Fredrick Marshall) China's Futher Place in Philology. (W. Simpson)

Japan. (“Macmillan” 1872)

Romance of the Japanese Revolution. (Blackwood. June '74)

Reform in Japan. (“Edinburgh Review” July 1872 Prof. Sir R. Alcock)

Japan as it was and is. (“Quarterly” Prof. Sir R. Alcock)

Le Theatre du Japon. (Bousquet)

L'intérieur du Japon (Bousquet)

Les Moeurs, le droit public, et privé du Japon. (Bousquet)

Une Excursion à Kioto. (?)

Formosa et L'expédition Japonaise. (E. Plauchut)

English Influence in Japan. (Sir C. W. Dilke)

Le Japon Contemporain. (Bousquet)

はじめの四件はサトウの同僚A. B. ミットフォードの著作が掲げられている。これらはすべてイギリスの文芸雑誌『コーンヒル・マガジン』に1869年と1872年に発表されたもので、その一部分は“Tales of Old Japan” (1871) に収録された。E. H. ハウスはアメリカの御雇外国人であるが、“The Japanese Expedition to Formosa” (1875) の著作があり、また劇評などでイギリスの論壇にも知られていた。F. マーシャルの「日本」はスコットランドの地主層に支持を得ているトーリーの雑誌“Blackwood Magazine”に投稿したものである。W. シンプソンは中国哲学について論述した。‘Macmillan’ に発表された‘Japan’ (1872) は W. S. Ayton の著作で日本の政府予算について論じている。‘Romance of the Japanese Revolution’ は A. I. Shand によって執筆されたものである。ついで、幕末にイギリス公使をつとめたR. オールコック¹²⁾の著述が二件つくが、前者は明治初期における天皇観の変化をとりあげ、後者は日本の飛躍的な進歩について論じている。

つづいてフランス人法律学者 G. H. Bousquet の仏文著作が4件ならぶ。これらは、はじめ横浜の仏文新聞 Echo du Japon に連載されていたものである。たとえば‘Les Moeurs, le droit public, et privé du Japon’ は 1875 (明治8) 年10月15日号から11月6日号まで掲載されていたのである。そして、この4件の論文はのちに“Le Japon de nos Jours’ (1877) の各章にくみこまれていった¹³⁾。なお、最後のC. W. ディルクの論文は西南四藩の家臣による明治維新について論じている。

以上が第一巻の内容であるが、次に第二巻の目次を掲げておく。

Le Japon. (Léon Pagés)

An open letter. (?)

Sette Genii Della Felicità. (Di Carlo Puini)

The treaty between Japan and England. (Tatsui Baba)

Beitrag zur Kenntniss des Riesensalamander. (J. J. Rein etc.)

Jitsugo-Kiyō. (B. H. Chamberlain)

The death-stone. (B. H. Chamberlain)

Japanese Miniature Odes. (B. H. Chamberlain)

Annual Reports on Diseases of the Chest. (Dobell)

E. M. サトウ蒐集ジャパノロジー資料について

Die Säculäre Hebung der Japonischen

Küste. (J. J. Rein)

Reis und Mais. (J. J. Rein)

Modern Japan. (D. Wedderburn)

The Mythology and Religious Worship of the Ancient Japanese. (E. M. Satow)

Evidences of Cannibalism in an early race in Japan. (E. S. Morse)

La Historia y la geografia del Japón. (Don E. Dupuy)

Recent Travels in Japan. (“The Quarterly Review”)

Old and New Japan. (R. Alcock)

Contemporary books (?)

The Omori Shell Mounds. (E. S. Morse)

冒頭のパジェスは著名なフランス人日本研究家であるが、この論文では幕末期の日本のことが論じられている(1859年)。馬場辰猪の日英通商条約についての論文が掲載されているのも興味深い。また、サトウやアストンとともに明治期の三大ジャパノロジストであるB.H.チェンバレンの初期の著作が3件つづいているが、前二者は翻訳であり後者は和歌の紹介である。ともに『コーンヒル・マガジン』に掲載された。ドイツ人日本研究家のJ.J.ラインの独文著作が3点あるのが目に引く。D.ウェダーバーンの作品はリベラル色の強い“The Fortnightly Review”紙にのせられたもので、1878年に発表された。E.S.モースの筆になる著述が二件あるが、これらは人種論と大森貝塚についてのものである。R.オールコックの作品は1880年に発表されているが、外国人の日本観についての論評である。

最後にこの本の編者であるサトウの論文をみると、これが発表されたのは今までの諸著作とははるかに下った1898年に発表されたものである。この編集物がまとまったのもそのころのことである。以上みてわかる通り、この“Magazine Articles on Japan”はSatow Papers (PRO 30/33)の1/3と1/5とは趣きを異にして文化誌的關係の記事がほとんどを占めていることが容易に理解できよう。そこにあるのはジャパノロジストとしてのサトウの姿である。

さて、今回紹介した資料はこれまで日本では“A Diplomat in Japan” 以外にはあまり知られていなかった E. M. Satow の活動を再検討するうえで、きわめて貴重なものといえる。サトウの日本情報が幕末期では政治的記事が大半を占めていたのに対し、明治初期になると文化誌的文章が多くなり、“Magazine, Articles on Japan” ではそれが極地となる。ここに外交官としてのサトウばかりでなくジャパノロジストとしてのサトウの姿が大きくクローズアップされてくる。そして、この期間において、明治中期以降に大成をみるサトウの日本学の片りんを垣間見ることができる。

今回の紹介は目次の紹介に終始してしまったため、かなり大雑把で分析も十分なしえたいえない。指摘すべき問題点も多々あるにもかかわらず、これを見すごしてしまったようであるが、今後のサトウ研究に一石を投じられていたら幸いに存じます。

註

- 1) これは市川清流『尾蠅欧行漫録』の翻訳であるが原著者と原著については、後藤純郎「市川清流の生涯——『尾蠅欧行漫録』と書籍館の創立——」（日本大学人文科学研究所『研究紀要第18号』）を参照のこと。
- 2) E. M. Satow, “A Diplomat in Japan” p. 159.
- 3) E. M. Satow, 前掲書 p. 361
- 4) 『幕末明治新聞全集』第三巻 p. 150
- 5) 同上 第三巻 p. 211
- 6) Sir H. Parkes to Lord Stanley. 2 May 1868 (F. O. 46. 93)
- 7) E. M. Satow, 前掲書 p. 409
- 8) Satow Diary. 1870. 12. 27 (PRO 30/33 15/3 pp. 45~46)
- 9) 同上 1871. 8. 22~31. (PRO 30/33 15/4 pp. 3~30)
- 10) 同上 1872. 3. 13~29 (PRO 30/33 15/4 pp. 104~119)
- 11) サトウの著作目録をみると、これ以降にも “Guide Book of Yedo” (1874) と “A Guide-Book to Nikko” (1875) を発表している。総合案内書への着実なあゆみ

E. M. サトウ蒐集ジャパノロジー資料について

がうかがえる。なお, “A Handbook for travellers in Central and Northern Japan” やその後身の “A Handbook for travellers in Japan” (B. H. Chamberlain & W. B. Mason ed.) については拙稿「チェンバレンの日本研究と『日本案内記』」(『近代日本形成過程の研究』雄山閣)を参照のこと。

- 12) 幕末期のR.オールコックの活動については, さしあたり増田毅『幕末期の英国人』(有斐閣)を参照のこと。
- 13) 野田良之・久野桂一郎訳『ブスケ日本見聞記1・2』(みすず書房)を参照のこと。

Ernest Mason Satow (1843-1929) is not only a British diplomat in Bakumatsu period, but also one of the three great Japanologists in Meiji era. Satow Papers (PRO 30/33) of Public Record Office in London includes his diaries, letters, and diplomatic papers. On the other hand, The Tenri University Library has Satow's “Magazine, Articles on Japan,” which he collected in early Meiji period.

In this article, we introduce some materials of Satow Papers and The Tenri University Library written in those days.

Shigetoshi KUSUYA

(Instructor at Nihon University)